

◆ 専科教員を含め全教員で取り組む ■ 全教員で取り組むが成果確認は担任が行う 無印 担任が取り組む

学校 教育 目標	中期経営目 標(フコ の数字は経 営方針の番 号)	短期経営目標	目標達成のための方策	成果指標	達成状況			分析	改善策	学校評議員会				
					当初 (5 月)	中間 (10 月)	最終 (2月)							
学びあう子 「確かな学力の 向上」(本年度重 点目標)	○教員の指 導力向上 (2)	①○返事をし、「です」「ます」「 思います」「からです」など、 語尾までしっかりと言うことので きる児童を育成する。	○ 句型を各学級で提示し、返事から発言の最後まで、はっきりと話すことができるよう指導していくとともに、教師が最後まで聞く。 ○ 学年の発達段階に応じて、語彙を増やしていくとともに自身の考えを適切に表現できるように指導する。 ○ 教員が返事をする身本を示すとともに、全校朝会等で呼名された際に返事をしようとする各学級において指導を行うとともに、返事をした児童を称賛し、行動の価値付けを行う。	A 身に付いた児童が、80%以上 B 身に付いた児童が、65%以上～80%未満 C 身に付いた児童の増加が65%未満	50.9%	63.1%	指導を継続していくことで返事をし、語尾まで話すことができる児童が増えた。特に、低学年での増加は大きい。今年度の取組として、読みの指導、教師による見本、全体の場での指導も効果があった。	・児童が発言している際に、教師が最後まで聞くとともに、丁寧で返せるように、今年度の取組を継続的に指導していく。	・発言する際に返事をし語尾まではっきり言える児童の育成については、学年が上がるにつれて上がっている。発言の際の表現方法を覚え活用できているからだと思われる。継続的に指導を重ね、発言のルールを定めてほしい。					
		②○自分の考えをもち、それを はっきりと伝えることのできる児 童を育成する。	○ 考えを形成するために必要な基礎的・基本的な指導事項の定着を図る。 ○ 時間を工夫し、全員が発言できるように場面を授業に取り入れるとともに、児童が考えるための時間を十分に確保できるように授業計画を行う。 ○ 児童の発言を教師が価値付けることで、児童が発言したことに対する達成感をもつことができるようにする。 ○ 発達段階に応じた基礎的な話し方に従って、話すことができるように国語科を中心に指導を行う。 ○ 児童がお互いの意見を傾聴する態度を育成する。	A 音声言語によって発言できている児童が70%以上 自分の考えを伝えられたと感じている児童が70%以上 B 音声言語によって発言できている児童が50～70% 自分の考えを伝えられたと感じている児童が50～70% C 音声言語によって発言できている児童が50%未満 自分の考えを伝えられたと感じている児童が50%未満						教員評価 50.0%	教員評 価 58.6%	教員の評価、児童の自己評価ともに増加にあるが、自己評価ではほとんどの学年で、考えをもっている割合と比べて評価が下がっている。また、教員の見取と児童意識の差が大きい。自分の考えをもっているが、発言できない児童がいる。	・児童が十分考えられる時間を確保するとともに、根拠をもつて考えることができるよう授業改善を行っていく。あわせて、自分の考えを相手に伝えることのできる方策を採る。「自分から手を挙げて発言する」と「発言内容」に分けて調査を行い、調査内容の精査を図る。 ・次の3つの視点で授業改善を図る。①児童の発言意欲を喚起する基礎的・基礎的な学習内容を活用②学習内容と生活とのつながり	・自分の考えをもち、それをはっきりと伝えることのできる児童の育成については、学年が上がるにつれて上がっている。発言の際の表現方法を覚え活用できているからだと思われる。継続的に指導を重ね、発言のルールを定めてほしい。
		③学年配当の漢字の読み書きと計算の練習をさせる。 ○ 漢字の読み・筆順・熟語の確認・繰り返し書き取り練習を毎日取り入れ継続する。 ○ 算数科において、習熟度学習を進める中で、基礎的・基本的な計算の仕方を定着させる。	○ ベーシックドリル等を活用しながら、前学年までに配当されている漢字の読み書き、計算の練習をさせる。 ○ 漢字の読み・筆順・熟語の確認・繰り返し書き取り練習を毎日取り入れ継続する。 ○ 算数科において、習熟度学習を進める中で、基礎的・基本的な計算の仕方を定着させる。	A 国語・算数の平均正答率が、それぞれ85%以上 B 国語・算数の平均正答率が、それぞれ80%以上 C 国語・算数の平均正答率のいずれかが80%未満						国語 81.0%	算数 71.4%	国語、算数ともに、前回と比べて上昇している学年と下層している学年があり、学年による差が見られた。	・継続的にベーシックドリルを活用するとともに、日常の授業で既習事項を活用する授業を計画することで、既習事項の定着を図る。	・全体的にはいろいろな面で積み重ねの成果は上がってきていると感じる。 ・教師と子供の自己評価が違ってくる。それだけしっかりと教師が取り組んでいる結果であり、教師が厳しく見ているということである。
		④○算数科を中心として問題解決型の学習指導を行い、「自分の考えを発表できる児童を育成する」【低学年】、「多様な考えを説明できる児童を育成する」【中学年】、「問題に合った考えを選べる児童を育成する」【高学年】、「自分の考えを伝えられる児童を育成する」【専科・つくし】	○ 考えを形成するために必要な基礎的・基本的な指導事項の定着を図る。 ○ 前向きに挑戦し学ぶことができるように、活動の発達しや結果の習熟の度合いに応じて、考えを伝え合う場を設定する。 ○ 児童間での考えを比較検討する場を設定し、共通点や相違点に目を向かせる中で、問題の解決に最も効果的な考え方について検討する授業を計画する。	A 教師設定基準を達成した児童が10%以上の増加 B 教師設定基準を達成した児童が5～10%増加 C 教師設定基準を達成した児童が15%未満の増加	レベル2 45.3%	レベル1 41.9%	レベル0 5.2%	レベル2 63.5%	レベル1 25.6%	レベル0 4.1%	ノート分析の結果、3～5年生にかけて、また、レベル2の児童が減少している。 【ノート分析の視点】 レベル0：考え方の記述なし レベル1：計算のみ、答えのみが示されている。 レベル2：答えを出した過程が記されている。計算の仕方が分かるように示されている。根拠として図や言葉による説明が示されている。	・計算処理の意味を理解させていくことで、その後の数学的思考力を伸ばしていきたい。		
		助けあう子 「豊かな心の 育成」	○自己肯定感をももち、他人も大切に する児童の育成 (1)	⑤○相手に対する思いやりと親切心をもたせ、いじめや不登校のない学校をつくる。	○年3回「ふれあい月間(いじめ防止)アンケート」を実施し、聞き取りを丁寧に行い、全職員で未然防止・早期発見に努める。 ○人権月間に、ビデオ・DVD教材を活用し、自分や他の命を大切にしようとする児童の態度を育む。 ○5年全員とスクールカウンセラーの面談・給食交流を実施する。また、年度当初に「心のアンケート」を実施し、児童理解に努めると、相談しやすい環境を整える。 ○「わたしの行動宣言」を各学級で話し合い、いじめのない学校にしようとする態度を育む。	A いじめられている児童が0% B いじめられている児童が1～5% C いじめられている児童が15%以上	15.0%	15.0%	22.0%	・生活指導全体で教員研修を行い、全教職員が同じ認識で児童に「いじめとは、どんな事か」指導を行い、児童自らいじめをしない態度を育てる。具体的な取組として、運動の授業やたわむれ交流活動の充実、ソーシャルスキルトレーニング等を実施する。 ・「わたしたちの行動宣言」を教室にも掲示し、いじめについて考えるような環境を整える。	・国立市のいじめの認知件数について増加傾向にあるが、潜在していたものを顕在化させることで、早期対応及び未然防止につながっている。 ・世の中のことは、いじめがないということや考えづらい。軽微ないじめに対応できる強さを身に付けてほしい。 ・あいさつは家庭でのしつけや働きかけが大きい面がある。 ・いじめのいじめの区別が難しい。学校見守りボランティアとして、子どもと顔を合わせることができ、小さな変化を見ている。 ・年度毎々のアンケート結果で、1点台の児童がいた場合は、全教職員でアンケート結果を共有し、褒め励まし自信をつけていくように指導を行う。	・1年生に2人アトム園の子がいる。日本語指導の時間をとって講師の先生が教えている。日本語を聞くことには慣れている。 ・今後、外国籍の児童が増えいていく可能性がある。これ以上増えていくとどう対応していくか、否小だけでなく市全体の環境とつながる。		
⑥○自分を大切に、自分に自信がもてる児童を育成する	○「自尊感情アンケート」を実施し、結果をもとに個々にあった自信をもたせ方を教職員全員で共有する。また、「道徳」の時間を中心に、自尊感情や自己肯定感を育む。 ○児童の表現活動(文章・発表・作品・演奏・身体劇)を交流する場を設け、友達の良い姿を伝え認め合い、互いを大切にしようとする態度を育む。 ○日頃から、保護者と密に連絡を取り合い、児童の良さやつまずきを共有し、児童に自信をもたせるようにする。			A 自己受容評価1点台の児童が0% B 自己受容評価1点台の児童が1～15% C 自己受容評価1点台の児童が15%以上	3.0%	4.0%	・児童の成長と共に、自分を客観視し、自分に厳しくなっている傾向がある。 ・5月に1点台の児童の半数が2月にも1点台であり、自己受容はなかなか上がりにくい傾向がある。	・自尊感情は、児童自ら上げる事は困難である。教職員は、常に児童の様子を観察し、よい行いを褒め、自信を持たせるように指導していく。 ・代表委員会が中心となって取り組んでいる年間3回のあいさつ運動や6年生が通年で行っているあいさつ当番活動等の積み重ねで、あいさつについて意識させ、定着を図る。						
⑦○社会の一員であるという自覚と他者意識をもった児童の育成	○各学級で年間として取り組む「あいさつ宣言」を決め、めあてを明確化して進んでいざつまずける児童の育成に努める。 ○6年生のあいさつ当番活動を活発にし、全校児童の手本となるように育む。 ○相手に聞かせることで、はっきりとした言葉であいさつをしたり、黙礼したり、慮に届いたあいさつができるようになる。			A 95%の児童が身についている。 B 90%の児童が身についている。 C 身についている児童が90%未満	88.0%	91.0%	あいさつができていた児童の割合は88%であった。低、中、高学年別に見れば、中学年が79%とやや低くなっている。							
⑧○基礎的な体力の向上に努める児童を育成する	○年間12回、木曜日の中休みに「リターンタイム」を設定し、クラスごとに、体力向上を図るための運動し、繰取り組ませる。 ○体育委員会による「リターンタイム」を学期に1回以上開催し、体力向上を図った運動を、ゲーム感覚で楽しみなで行う。 ○各クラスで1年間を通して行える体育的活動を「学年一貫」として、設定する。 ○増えたいちごの運動を、「くまのダンス」を「リターンタイム」に取り入れる。 ○保健だよりにて、早寝早起き朝ごはんなどの大切さを伝え、保護者への感謝啓発を行う。 ○中休み、昼休みのどちらかは外遊びをさせるようにする。			A 休み時間以外遊びをする児童が85%以上 B 休み時間以外遊びをする児童80%以上 C 休み時間以外遊びをする児童80%未満	88.0%	84.0%	84.0%	・「中休み、昼休みどちらかは外遊びをする」という結果が定着してきている。 ・児童が積極的に各クラスで外遊びをするようになり、全体の外に出る児童が増えた。	・外遊びできるように、担任から前向きに声掛けをしていく。クラス単位で、確認の取組を計画させ、児童相互やじどうと教師との交流が図られるようにする。 ・85%を目標として、外遊びを通して基礎体力づくりに取り組む。(PUTYやPUE)					
⑨○基礎的な体力の向上(3)	○前向きな話し合いをしないで、ハラスメントのたぐいの生活(給食)を送れる児童を育成する			○保健給食委員会や校長講話等で食の大切さについて話し、残菜減量についての意識啓発する。 ○給食指導目標を基に、各学級で声かけをし、残菜減量に向け声かけをする。 ○食育月間で、発達段階に応じた食育指導を行う。 ○児童の笑顔に応じて残菜減量のための活動を保護・給食委員会と取り組んでいく。	A 給食を自分で食べることができる量に調節し、残す児童が80%以上 B 給食を自分で食べることができる量に調節し、残す児童が80%未満 C 給食を自分で食べることができる量に調節し、残す児童が80%未満	94.0%	96.0%	97.0%	もぐもぐタイム(5分間静かに食べる)ことで食べることに集中することができた。 ・残菜チェックすることでクラスで残す児童を減らすことに意識するようになった。90%の児童率が維持できている。	・「いただきます」の前に、食べられる量にするよう声掛けをしていく。				